

教育のイメージ ⑤ “その子らしさ”として結実するために

平成27年3月 理事長 片山喜章

「より良い教育内容」は、時代（生活様式）の変化、人権意識の成熟とともに変容すると考えます。昨今の国際紛争は、たいそう複雑な様相を呈して、今後一層、悪化の途を辿る懸念を感じます。わたし的には、世界を駆け巡る「情報量の力」によって、人間という《種》の「自意識」や「幸福希求度」が地球規模で飛躍する一方で所得格差、能力格差が増大する不満。科学技術の進歩によって快適さ、安全性、利便性を享受し、追求する。その結果、データ管理や地域社会の喪失など、窮屈で希薄な社会が形成され、人間関係に歪みをもたらす。人類史的に止め難い巨大な渦が造り出した帰結だと感じています。そんな状況下で、私たち大人は「より良い教育内容」を模索しなければなりません。そこには“二種類の大人の願い”があることに気づきます。

こんな時代だからこそ、負け組にならないように、我が子には他者より（評価対象になる）学業が優れ、一芸に秀で、あるいは多彩な能力を発揮するための教育を可能な限り受けさせたいと願います。そんな自然な、切実な親心を園は、どのように受けとめるのか、そこを斟酌しないで、単に「社会性や協調性の育成」を唱えても、なかなか響かないと思われれます。

一方で、こんな時代だからこそ、例えば、いじめに屈せず（いじめに加担せず）、問題を自分たちで解決する知恵（共感力、判断力）を身につけて、どんな困難にも屈しない精神の持ち主になってほしいと願います。そのために、子どもが園生活の主役になれるよう、子どもどうして話し合っ解決する経験がたいそう価値のあることだと認め、その機会を常に用意し、多種多様な事に挑戦できるように環境を整える。それが、公的な教育の役割であると考えています。

では、園の教育は、個々の（見える）能力の育成はしないのか、という疑問が生まれます。

実際は「心情」「態度」「意欲」（幼児教育の基本ワード）を育んだ結果として、個々に見える能力が備わります。種の会の特色である「サーキット運動」は、運動量が豊富で多彩な遊具設定ゆえに「態度」や「意欲」を育てます。その結果（成果）として「体力（調整力）」は向上し、それは、その後、出会う様々なスポーツの基礎能力となるばかりか、“愉悦経験”として、その子の体内に蓄積されて、それは困難に立ち向かう良質のエネルギー源になると推察できます。

「何か」ができるようになることは、芽が出て茎が伸び、花が咲き、実を結ぶようなものです。それは、その子らしさ（適性）の中で成長しますから、各家庭に委ねる部分が大いだと思います。

一方、その子らしく実を結ぶために、乳幼児期は、集団生活のなかで「より良い畑」を用意するといつてよいでしょう。目には見えない根っこの部分が、丈夫に成長するように、保育者は、陽光の一部となり、肥料をやり過ぎず、水をあたえ過ぎず、酵素や細菌がほどよく混ざっている、そんな土壌づくりに力をそそぐ、それが、園の教育部分の基本的役割、教育のイメージです。